SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

サン=マルタンにおける人間と自然

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2008-01-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 今野, 喜和人 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00000401

サン＝マルタンにおける人間と自然

今野　喜和人

はじめに――エコロジカルな視点から――

環境問題が深刻化するにつれて、西洋が生んだ近代科学に対する反省の意識が高まり、思想史の分野でも人間による環境破壊を後押しした犯人探しが行われるようになった。その過程で、近代科学とは対蹠的位置にあるように見えて、そのじつ西洋的思考法を根底から支えているキリスト教に疑いが向けられるのはある意味で当然の流れだったとも言える。なかでも一九六〇年代に科学史家リン・ホワイトの行なった「現在の生態学的危機の歴史的根源」[1]と題する講演は、その後のエコロジーと宗教をめぐる議論に決定的なインパクトを与えるものだった。

人間は神の似姿として、人間以外のすべての生き物を「支配」するべく定められたとする『創世記』冒頭の記述に象徴的に表されている通り、「キリスト教の、とくにその西方的な形式」は、「世界がこれまで知っているなかでももっとも人間中心的な宗教」であり、人間による自然の搾取を押し進めた張本人であるとホワイトは言う。宗教的思考法から脱却す

ることから生まれたように思われる近代西洋科学は、むしろキリスト教神学の母体の中で鋳造されたことを彼は力説したのである。この主張に対して、教会側に立つ人々からはホワイトの歴史的・神学的無知を指弾する形で様々な反論が提出され、同時に聖書や教義の新たな読み直しが試みられた[2]ものの、過去数百年キリスト教を浸食し続けてきた懐疑が、現代の最も重要な課題である環境問題との絡みで、新たな段階に達したことは間違いない。もはやキリスト教は地球の未来を左右する問題に対して無力ではないのかという見方を広げるのにホワイトの説は貢献したと言えよう。

一方これと反比例するようにキリスト教以外の宗教に対する関心が増大し、環境危機に対処するための新たな智恵をアジアの諸宗教や、世界各地のアニミスティックな土着的信仰の中に求めようとする機運も加速された。同じキリスト教を標榜していても、自然とのより親和的な関係に特徴付けられる異端的な思潮（「生態学者の聖者」たるアッシジの聖フランチェスコは「異端」ではないが、彼が火刑にされなかったことをホワイトは「奇蹟」とする[3]）も、エコロジカルな観点から再評価が行われるようになった。

近代科学的世界観の一応の完成期たる十八世紀にあって啓蒙思潮に反旗を翻し、かつ教会とも距離を保ち続けたイリュミニスト、サン＝マルタン（Louis-Claude de Saint-Martin, 1743-1803）の人間観・自然観をここで取り上げてみようとするのも、こうした関心の高まりの延長線上にある。ロマン主義の先駆者として扱われることの多い彼の著作中には人間と自然の関係をめぐる考察が相当な分量を占めており、その主張はしばしば矛盾を含んで統一的印象を結びにくいものの、現代のエコロジーの議論を頭に入れた上で今一度読み直して見る価値はあると思われる。ただし、本題に入る前に、サン＝マルタンの思想が現代の錯綜した環境問題に直接有効な処方箋を提出し得るという期待に対しては、あらかじめ疑問符を付けておいた方が良いかも知れない。

現代においてエコロジーへの共感を表明した各方面の議論を見ていると、環境破壊をもたらした人類史への反省、ある

いは近代の超克を標榜しながら、実は自らの拠って立つ足場、あるいは担ぎ上げる対象の弁護・称揚のためにのみなされているような主張が往々にして見られる。西洋人自身によるキリスト教批判、アジア宗教の再評価をそのまま引き受けて、自民族中心主義的な自然観を何の疑いもなく提出する日本（あるいはアジア諸国）の「エコ・ナショナリズム」の傾向は早くから顕著なものがあるが、自らの奉じる宗教・教義・教祖（あるいは研究対象）・・・の権威を増大するためだけの「エコ・護教論（アポロジェティック）」とも呼ぶべきものが世界中に蔓延しつつあるように思われる。そうした傾向が自然への関心を高めて来たという貢献は認められるにしても、問題の安易な解決を求めて特定の思想を復活させ、互いに押しつけ合う事態になれば、また新たな対立の火種を生むことにもなろう。複雑きわまりない様相を呈している環境危機に対処するには近視眼的な見方を排し、様々な知恵と知恵の対話を通じて可能な限り広い視野を獲得することによってしか道は開けない。近代化の過程の中で抑圧され、忘れ去られてきたテキストの発掘の意味はそこにあるのであって、本論もそうしたまなざしの拡大と深化以外の目的は持たないし、持ちようがないことをはじめに確認しておきたい。

一、自然の沈黙、自然の言（ことば）

キリスト教は人間の魂の救済を第一義的目標にするところから、現世よりも他界を、物質よりも精神を、肉体よりも霊を重んじる傾向があり、これが自然の軽視につながって、近代科学による自然搾取を正当化したとする説は、キリスト教を批判するエコロジストの多くが指摘するところである。こうした現世的自然蔑視がユダヤ・キリスト教伝統の最も深い根源から発するものであるかどうかは議論の分かれるところだが、人間の原罪と共に「地は呪われるもの」となったとする『創世記』第三章の世界観は、その後ギリシャ的な二元論との出会いによって強化され、キリスト教の底流となったこ

とは否定できない。

ヤコブ・ベーメを一つの源とする近代のいわゆる「自然神秘思想」の流れの中でも、こうした自然の転落は中心的なモチーフの一つとなっており、パウロによる「被造物は虚無に服している」[4]という言葉はこの伝統に連なる思想家たちによって再三再四引用される。[5] サン＝マルタンもまた例外ではなく、転落以前の原型的自然に比べ、いかに現行の自然が混乱の印を帯び、かつ仮象的なものに過ぎないかを度々指摘している。[6] メタフォリカルな表現を好んだサン＝マルタンによれば、それは宇宙の「眠り」[7]であり、「病」[8]であり、「渇き」[9]であるが、何よりも「自然の沈黙」として言い表される事態である。「自然は沈黙の内に留まっている」[10]、「罪が犯された瞬間に、もろもろの世界という世界は不透明となり、重力の手に委ねられた。罪は生命の言葉を〈凝固〉させ、自然全体を無言の存在とした」[11]、「宇宙がもはや言葉を持たないということに我々が気づけば、それこそ宇宙の蒙っている苦しみの主要な原因の一つであることを知ることは難しくない」[12]等々。

これはサン＝マルタンの思想中に確かに存在する他界志向とも結びつく発想であり、その限りでは自然に実体的な価値が与えられない。しかし、彼の作品を丹念に読めば、こうした自然軽視的な文章とは全くベクトルを異にする文章が散見されることに人はすぐ気が付くだろう。そもそも彼の代表作『渇望する人』の多くの断章はこの世に溢れる神のmerveilles（奇蹟・驚異）を称えたものであって、第一断章から既に「春が野原を色とりどりに飾る、かの数知れぬ花の如く、奇蹟はここかしこに光り輝く」[13]と歌われるのである。しかも、この自然賛美、田園賛美は十八世紀人らしい都会嫌悪と時に対になって提示されることも注目に値する。

自然が支配するところから遠く離れ、怠惰とあらゆる種類の不節制の内に生き、都会の汚れた空気しか吸わずに、広々とした空間の清浄な空気による活生作用に向けて全身の脈管を開くことのない人々に、いかなることが起こるか観察せ

よ。彼らは、身体が病に満たされるばかりでなく、ありとあらゆる悪しき情熱に駆りたてられ、自らの存在の使命と権利についても、また至高の知恵が永遠なる計画に沿って定めた万物の大いなる体系についても、あらゆる種類の闇が精神を覆うのである。すなわち、これらの迷える人々は自然から遠ざかることによって、なべての悪徳、誤謬に向かって防壁を開いてしまうように思える。

その反対にこの同じ人々が、秩序ある自然に近づいてその支配に従い、都会の堕落した環境から逃れて田園の開けた清浄な空気の中で、活動的な生活によって生まれ変わらんとする幸運と勇気を持った時に、何が起こるか観察せよ。彼らの卑しく堕落した情熱は影をひそめ、彼らにふさわしい秩序の中に帰り、あたかも清らかな自然に近づくことで、自然の活生的影響の中に吸いこまれていく様が見てとれよう。その結果、彼らを悩ませていた混乱は消滅し、自然の絶大な力に圧倒されるのである。[14]

引用箇所はこの宇宙を「牢獄」と見るグノーシスのモチーフを用いた章にあるが、その「牢獄」は「悪」を閉じこめ、無力にする役割を果たすものとして、むしろ積極的な価値が与えられ、グノーシス的な現世嫌悪とは明確に一線を画していることが分かる。さらに特徴的なことは、こうした神の息吹に貫かれた自然の描写が、ここでもまた視覚と共に聴覚的な表現によってなされることである。すなわち、この世における神の命の偏在は何よりも神の言、ロゴスの充満として表されるのである。ふたたび『渇望する人』第一断章を引くなら、

原初、山の上からあなたの言葉は切り立つ岩肌に落ちる奔流となって砕け散った。
流れが水煙となって舞い上がる様が私には見える。空中に舞う水滴一つ一つに、太陽の光が映し出される。

こうしてあなたの言葉の発する光線が、賢者の目に向かってあなたの生命の光、聖なる光を輝かしめる。賢者は知る、あなたの働きが全宇宙に存在と生命を与えていることを。[15]

では、先に指摘した「自然の沈黙」の状況と、このような神の言の横溢とはサン＝マルタン思想の内部でどのように調停されているのだろうか。周知のごとく、ユダヤ・キリスト教伝統の中にもホワイトらが指摘する自然軽視の傾向と共に、この世を神のなした「驚異」（『詩編』の文語訳的に言えば「奇しき事跡」）として称える潮流が確実に存在する。エコロジーによる批判からキリスト教を弁護する人々がすくい上げようとするこのような傍流（その中にはユダヤ教に発するソフィア（知恵）[16]からキリスト教のロゴスのテーマへと連なる流れも含まれる）が、主流的な前者と共に、サン＝マルタンの中をも流れているということなのだろうか。この二つは彼の中で相補的なものとして、互いの権利を主張し合っているだけなのだろうか。論理的な記述方法を採っているかと思うと、対立する命題をそのまま投げ出したり、詩的・象徴的表現と混ぜ合わせるサン＝マルタン独自のスタイルから、この二律背反を調停するのはなかなかに困難である。

その理解のためには、まずなによりも彼の宇宙創生論―終末論的な枠組みを意識に留める必要がある。原初における楽園的自然は人間の「罪」によって転落を蒙っているが、この世の終わりに「神の国」が到来し、新しい天と地が完成して円環は閉じられるという発想がキリスト教の根本にあり、サン＝マルタンもしくは他の多くの自然神秘思想家も基本的にこれを共有している。したがって現時点における「沈黙する自然」は過去と未来における「言する自然」に挟まれたものとして、まず通時的に理解しなければならない。「原初」、「奔流となって砕け散った」神の言は、人間の罪による隠蔽、〈凝固〉を経て、終末にあたって再び融け出して語り始め、「沈黙は破られ」る。「宇宙のありとあらゆる場所は生ける言葉と化」[17]し、生きとし生けるものによって「新しきエルサレムの中心で永遠の合唱」[18]が行われることが約束されているのである。

しかしこのような枠組みは来世志向、現世否定の傾向を強めこそすれ、自然に対して積極的な視線を向ける姿勢には繋がらないのではないかという疑問は当然生じよう。けれどもサン＝マルタンにおいては、原初と終末に発せられる神の言が時間の外にありながら、かつ現在の中にも息づいているという確信の面が強かった。「神の国」の未来性と現在性をめぐるこの永遠の課題に解決を与えるのは、彼にあってはメタファー、それも植物に関わるメタファーである。すなわち、神的な原理、言葉の原理は「種」、「萌芽」として人間および万物という地の中に播かれていて、常に成長の時を待っているとされる。

主の種、言葉の種はまた新たに人間の魂の中に播かれた。

［……］

［主の種よ］あなたこそ普遍の力、ありとあらゆる存在の中で成長するもの。あなたは万物を創り、あなたの力の段階を追う成長によって万物を支える。

私の中で芽を出させたまえ。あなたは万物と同じく私にも存在を与えた。生命を与えるあなたの業によって、万物と同じく私の存在も保たせたまえ。[19]

むろん、植物関係の比喩は言語の発生以来存在するものであり、ここで用いられている「種」の比喩もなんら独創的なものでなく、おそらくはストア派の「ロゴス・スペルマティコス」（種としての言、種子的理性）まで淵源をたどることのできる、アルカイックなものだろう。[20] しかし、サン＝マルタンにあって種、萌芽、開花、成長、根、土壌、樹液等々の植物的なメタファーは彼の世界観全体を規定しており、そのダイナミックな自然観、歴史観、人間観の中核にあって、乾燥

した哲学的表現や合理的論証との間に魅力的な不協和音を奏でている点で、我々の注意を惹かずにいない。

いずれにしても、サン＝マルタンの言う「自然の沈黙」とは、常に発芽と開花を待っている潜勢的な沈黙であって、決して死と闇の支配する沈黙ではない（種は「生命が死の中に秘められている」状態だとも彼は言う[21]）。「無限の空間の永遠の沈黙」はパスカルを「恐怖[22]」させたが、サン＝マルタンにとって「この沈黙ほど雄弁になりうるものはない」、なぜならそれは「苦悩から発する沈黙であって、無感覚性から発する沈黙ではない[23]」からである。だが、そのような沈黙から言葉を聞き取る力は誰にでも与えられているのだろうか。啓蒙合理主義的な真理の普遍性の要求にかなうものであろうか。これについて彼は言う。「然り、地上的な人間には自然の沈黙と悲嘆しか目に入らないが、渇望する人々よ、君たちは自然の中ですべてが歌っていること、崇高なる賛歌によって自然の解放を予言していることを確信する[24]」。すなわち、こうした自然の「雄弁なる沈黙」から言葉や歌を聞く耳を持っているのは、神と一体になろうとする渇望を引き受けた人間だけである。あるいは自然という「ヒエログリフ[25]」を読みとることが出来るのは、ある種の照明（啓蒙の知識 lumières ではない神からの光 illumination）を得た「賢者」（先の『渇望する人』第一断章の表現）だけだと言い換えてもよい[26]。自然界の調和を描くことで神の存在を証明しようとする同時代のベルナルダン・ド・サン＝ピエール、シャトーブリアンらの（前）ロマン主義的トポスに対して、サン＝マルタンは常に批判的だったことも、指摘しておくべきだろう[27]。転落して病んでいる現行の自然は日常的な感覚に埋没する者に向かって、決して調和と安寧のハーモニーを奏でてはくれないのである。ここにおいて神秘思想家サン＝マルタンの秘教的な姿勢が明らかになるとともに、自然の転落と解放のドラマの中で果たす人間の決定的役割が示される。

二、渇望する人の使命

現代における環境の危機をもたらした最大の原因は近代科学とキリスト教という共犯者たちによる「人間中心主義」であることがエコロジストたちによって指摘されている。サン＝マルタンの思想からも、こうした人間中心的な志向を取り出すことは、実は決して困難でない。

十八世紀の自然観を考えるために避けて通ることのできない「存在の連鎖」観に関連してこのことを見てみよう。この世界が無機物から有機物へ、さらに植物から動物、人間を経て天使的存在、究極的には神に至るまで、それぞれ可能な限り小さな完成度の相違を通して連結された一本の「鎖」（あるいは階梯）を形成しているというこの発想は、プラトン、アリストテレスの昔から十九世紀まで、神の創造行為を合理的に説明するための西洋的自然観を陰に陽に支えてきた。この観念の歴史に精緻な照明を当てたラヴジョイの古典的研究[28]が明らかにしているように、とりわけ十八世紀は存在の連鎖観が最も流布し、各方面から一つの合い言葉のように語られた時代である。重要なのは、この創造観が持つ意味が一つに固定されたものではなく、いくつかの相反する方向を内に秘めていて、そのどれに力点を置くかによって全く色彩の異なった世界像を描き出すという点である。すなわち、「連鎖」の一体性、連続性に力点を置くのか、それとも上下関係、とりわけ現世的被造物の頂点に人間があることを強調するのか、はたまた連鎖を上から（神性や人間的感性の偏在性を説くために）眺めるのか、下から（極端な場合には唯物論を説くために）眺めるのか、等々によって性格が大きく変化し、時に一人の思想家の内部でも（例えばディドロ）矛盾に満ちた様相を呈している。

サン＝マルタンの「存在の連鎖」観も錯綜した意味内容を包み込んでいるが、自然との関係において人間中心的な方向

性を取っていることは明らかであって、とりわけ次世紀の進化論に直結して行く、人間と動物の距離を接近させようとする自然観には早くから警戒の姿勢を崩さなかった。おそらくジュネーヴの生物学者シャルル・ボネを念頭に置いた次の文章を見てみよう。

事物の本性に関して最近装いも新たに登場したある誤った学説に反論しておきたい。その説によると事物には漸進的完成可能性があるとされ、存在の鎖の最低の階層と種から出発して順次段階をおって上昇し最高の段階に到達すると言う。その結果この説に従えば石が木にならないとは言い切れず、木が馬になり、馬が人に、さらには気が付かないうちにもっと完成された存在にならないものでもない。真の原理に対する無知と誤謬によって生ずるこの推測は、綿密に検討していくとすぐに破綻をきたしてしまう。[29]

「存在の連鎖」は現代のエコロジカルで全体論的（ホーリスティック）な世界観とも通底し得る側面を持っているが、[30] サン＝マルタンにとってこの鎖を下から眺める、すなわち動物やさらには無生物の延長線上に人間を置く思想はすべてはねつけられ、被造物の中での人間の特権的位置が常に強調される。次の文章はとりわけ明確であり、人間の科学技術に対する素朴な信頼をも読みとることができる。「自然に対し自分が優位に立っていることを君は知りたいのか。動物たちの能力を拡大したり縮小したり、君は思いのままにできる――このことに思いを致せ。望むなら君はあらゆる物質を完成させることもできる。君は王であり、光の天使である。あるいは少なくともそうあらねばならぬ[31]」

サン＝マルタンの作品中には同時代の自然学から借りた発想も多く見られ、科学を媒介にした自然への働きかけを「神への冒瀆」として無条件に否定するような態度は決して取らないのである。その限りでは人間による自然支配はここで肯

定されているように思われる。しかしながら、右の引用の最後の「少なくともそうあらねばならぬ」という箇所に注意を留めた上で、さらにサン＝マルタンの言葉から人間と自然の上下関係を論じた部分を探してみると、これとはまた全く異なった主張も見出される。

自然界のありとあらゆる存在の中には人間にとって屈辱となる見本しか無いと言っても良い。それら自然の万物はみな主体的で、抜かりなく、均整のとれた存在ばかりだ。ただ人間のみが受け身で、注意力も締まりもなく、ある意味で怪物的である[32]

その上、自然に対する人間の影響力を肯定する方向性に関しても、それが近代自然科学的な自然の搾取の承認にそのまま通じるものであるかにどうかついては、留保を付けなければならないだろう。サン＝マルタンには、近代自然科学に対する批判の点でも、ロマン主義の先駆者としての側面があることを忘れてはならない。それは現代のエコロジストを思わせるような、人間の「傲慢」への攻撃、「へりくだり」の礼賛の形で行われる。

贅を尽くして建てられ、壮麗さを誇示するきらびやかな建物の上に立って私は見た、単純極まりない自然が人間を屈服せしめるのを。

この虚栄の産物の上に立って私は見た、自然が一本の草、かそけき苔を生み出し、この業一つによって人間たちの作り出したものすべて、傲慢さのすべてをかき消してしまうのを。

百合の花は栄華をきわめた時のソロモンよりも着飾っている。人間よ、いつ君は己の手から生まれた驚異が児戯に類

したものであることに目を開くのか。[33]

あるいはまたサン＝マルタンは、自然の行う業が「絶えざる創造」であるのに対して、人間に創造能力はなく、単に「物の位置を入れ替える」だけであることを指摘し、さらに自然科学の分析的な知を次のように非難する。

小鳥を一羽、子供に与えてみよ。小鳥の体の中に何が隠されているかを知りたくて、小鳥をばらばらに引きちぎるだろう。

子供に花を植えさせてみよ。根を張るのを見たさに、子供は毎日花を引き抜くであろう。

自然をこのように詮索して飽くことのない、子供にひとしい人間よ。君たちは新たなる天地創造を託されていると言わんばかりである。[34]

現代の遺伝子工学やクローン技術等を批判する議論にまで範囲を拡げずとも、時代的にはこの直後に位置し、自然に向かい合う際の「おせっかいな知性」を批判したワーズワースの有名な“We murder to dissect”（人は分析するために殺す）という詩句[35]が連想されよう。あるいは、芭蕉の「よく見ればなずな花咲く垣根かな」という句と、テニスンによる、「壁の割れ目」に咲いた花を「引き抜き」、その花のすべて、さらに「神と人のなんたるか」を知ろうとする詩とを引き比べて、日本と西洋の自然観の比較を行った鈴木大拙の講演[36]との比較を思い立つ向きもあろう。

ともあれ、沈黙する自然と言（ことば）する自然の間に見られたような矛盾した表現がここ人間観においても両立していて、読者を戸惑わさずにおかない。もちろん、自然の上にあり、かつ自然の下にあるという人間の二重性の認識だけならばなんら

新奇なものではないし、恐らくはルソー[37]などから直接にサン＝マルタンに流れ込んだ部分もあったろう。ただ、サン＝マルタンにあってはこの人間の二面性も、より大きな神智学的世界観の中に組み込まれていることを理解する必要がある。

サン＝マルタンら多くのキリスト教自然神秘思想家が（細部の違いはあれ）信じる宇宙創世観によれば、人間の創造はそれ以前の霊的存在者の創造（流出）とその背反の後に行われたものであって、この時のアダムは神に背いた霊的存在者たちの悔悛のために働く、巨大な力を備えた神＝人であった。しかしアダムもまた罪を犯すことで転落を蒙り、物質世界に閉じこめられて原初の不滅のからだも、比ぶものなき偉大な力も奪われた結果、人間の現状が生じたとされる。ただし、人間の転落と共に自然も転落して「虚無に服する」存在となったことは既に指摘したが、自然が沈黙しながらも、「種」の形で言葉を内に秘めていたように、人間もまた再生のための潜勢的な力を失わずにいるものとしてサン＝マルタンに捉えられる。「第二のアダム」たるキリストにならうことで、渇望する人間は原初の神＝人の地位を回復する可能性が与えられているのである。

先に見た、人間に関する矛盾対立したイメージもこの観点から眺めるべきであって、人間の転落を強調した文章と、人間の本来的可能性を称揚した文章がサン＝マルタンのなかでは拮抗している。しかもそのいずれもがペシミズムに繋がらず、人間に渇望を植え付け、行動へと促すためにあることに、サン＝マルタン思想の神髄があるのではないだろうか。人間を「王」、「光の天使」と呼んだその後に、「少なくともそうあらねばならぬ」という文章が付け加えられた意味はこれで明らかになるだろう。

その行き着くところは万物が神の懐に帰る「再統合」として現世的時間の外にあると共に、現在を生きる人間の問題でもあることは言うまでもない。つまり自然観と同じ構造が人間観においても示される。その決定的な第一歩は、前章で既に指摘したように、自然の沈黙の下から言葉を聞き取るためのある種の覚醒である。バルザックが『セラフィタ』の中で

剽窃したことから有名になった『渇望する人』の第四六断章[38]は、神秘主義者の多く、あるいは一部の詩人・芸術家（キリスト教世界に限定されない）が、自然の内奥をのぞき込むことのできた瞬間に経験する照明のヴィジョン[39]を語っているらしい。「私はいまふいに、思いがけぬ心のゆらぎを覚えた。何とも知れぬ力が私の上に加えられた。」と語り出すこの語り手は、「普遍の源が如何にして万物に生命を吹きこみ、運動の源泉たる消えることなき火を分け与える」かを感嘆して眺め、「すべては個別のものでありながら、すべてはただ一つである」という確信を得た後、地上的なありようを越えた耳を獲得する。

宇宙を構成する部分という部分が、一つの崇高な旋律を奏でるのを私は聞いた。高音と低音が釣り合い、渇望の歌が歓喜の音と釣り合っていた。秩序が至る所で打ち建てられ、大いなる統一性の存在を告げるために、音と音が互いに支え合っていた。

この宇宙の調べが耳に届くや否や、生きとし生けるものはみな、一つの同じ運動に引きずられるようにして、永遠なる神の前に打ち揃ってひれ伏した。幾度も繰り返される彼らの賛辞と祈りとは、いとも快い合奏の魂であり生命であり拍子であるように思われた。

こうして全能なる神の生命の声がまず歌い出して以来、被造物全体が歌うよう定められた賛歌。この世の続く限り広がって行くべき聖歌が完成したのであった。

しかし、このヴィジョンを得た者にとっては、既に視覚と聴覚の隔ては消えている。なぜなら、その体験はすぐれて共感覚的なものでもあるからである。

我々の住む闇の世界では、音に比べられるのは音だけ、色に比べられるのは色だけ、物質に比べられるのはその類似物だけである。だが、かしこではすべてが同じ性質を持っていた。

光は音を発し、旋律は光を生み出し、色は運動していた。色は生きていたからである。ものはすべて、音と透明性と活動性を持ち、互いに浸透し合って、広大な空間を一気に駆け抜けることができた。

こうして、人間が覚醒して再生への道を歩み始めるとき、自然界の様相は一変して真の意味でのコレスポンダンスは完成する。終末として時間の外にあるこの目標点を、自然と人間の関係において現在のものとすることに、〈渇望する人〉の使命はある。

今一度繰り返せば、「自然の沈黙」とは人間の転落（原初における形而上的失墜と共に、近代科学的な分析知の絶対視）[40]がもたらした事態であった。しかしそれは同時に、人間が再生・回復することによって自然界に原初の言（ことば）が蘇ることをも意味している。宇宙と人間の連関は、単にマクロコスモスとミクロコスモスというような静態的なアナロジーによるものでなく、ダイナミックな運命の共同性と共にあると言えよう。したがって人間の責任は重く、「人間という鏡が輝きを失えば、その後に続く鏡の連鎖を断ち切り、それらの鏡も曇らせてしまう」[41]危険性もあるし、人間が自らの中に真の言葉を蘇らせたとき、「言葉と光の中で蘇ったすべての領域」が、人間に合わせて「天まで声を届かせる」[42]未来、万象の「コミュニオン」[43]への道も約束されていることになる。ただしその道のりは遠く、「人間という木は、アダムの末裔たる人間全員の協力によって、実をつける務めを常に負って」[44]おり、「穏やかな忍耐によって活動を行い続ける植物たち」[45]をモデルにして、「希望とへりくだり」[46]と共に、真の意味で人間が「自然の修復者」[47]となるまで努力し続けなければならないのである。

むすび

環境破壊をもたらしたキリスト教―近代自然科学の「人間中心主義」への批判の中で、その対立項たる「自然中心主義」や「生命中心主義」が唱えられ、人間の権利と自然の権利を秤にかけて時には後者を重視するような「ディープ・エコロジー」の考え方が生まれた。しかし、「自然」というものが、近代化（＝生態系からの人間の遊離）の過程の中で人間が初めて対象化した虚構である以上、人間を捨象した形での「自然保護」は幻想でしかあり得ないし、仮に人間の存在を極力消す形で生態系を成立させたとしても、そのことに「自然」は感謝することもなく、権利に応じた責任を引き受けることもない。人間の独り相撲に終わるだけである。要は人間が生態系に拘束された存在でありながら、そこを抜け出ようとする本性を持つこと、生命環境が一変してしまえば生き延びられない無力な存在であると同時に、その環境を悪しき方向にも自分に望ましい方向にも変化させる力を手にしているということ、こうした人間に関わる二重性の認識なしに、自然と人間をめぐる議論は生産的な論点を生み出せないと思われる。また、「弱肉強食」的な自然観が、人間による身勝手な擬人観から生まれた神話であるとするなら、「調和のとれた無垢な自然」というイメージも、人間の責任によらない生物種の絶滅が太古から続いていること一つを考慮に入れれば、簡単に破綻する。自然の恣意的搾取を容認する形で人間を「自然の主人にして所有者」（デカルト）と規定してしまった近代の「人間中心主義」を反省することは必要だが、ロマン主義的な自然観から生まれる素朴な自然賛美や「自然中心主義」は、人間的な価値を抑圧したり、人間の責任を回避する偽善ともなりうることを人は知らねばならない。

この観点からすると、サン＝マルタンの自然に関する論考は現代のエコロジーに対しても示唆的な主張を含んでいるよ

うに感じられる。彼の言う「自然の沈黙」とは現在の環境破壊を念頭に置いたものではないし、その背後にある宇宙創造―終末観は現代人を支えている科学的世界観と隔絶した神話的なものであるけれども、近代の曙に人間と自然の損なわれた関係を既に見通して、人間の側の変革、すなわち本来のあるべき姿への漸進的回帰＝進歩の重要性を訴えた彼の言葉は、我々の耳にもそれなりの重みをもって響いてくる。感傷的な自然崇拝とは一線を画し、自然界の調和と不調和を見据えた上で、科学の効用と限界、人間の力と責任、ユマニスティックな信頼とへりくだりの重要性、人間＝自然間の運命の連帯性を語る言葉は、語る次元を変化させれば、環境倫理のメッセージに十分転調可能ではないだろうか。

だが、本論の冒頭で触れたように、環境問題に対する具体的・即効的な解決策を過去のテキストの中に性急に求めることは慎むべきであろう。とりわけ矛盾と対立をあえて解消せず、メタフォリックな言説を用いてしか表現できなかったサン＝マルタンの根源的自然認識は安易な還元を拒絶するところにむしろ意義があるといっても過言ではなく、それをどう読みとるかは読者次第であって、本論はその一つの可能性を示唆したに過ぎない。ここはサン＝マルタンが人間中心主義対自然中心主義、西洋的自然観対東洋的自然観といった、多分にイデオロギー的な対立を相対化し得る存在であることのみを指摘して、人間と自然の関係を巡る議論にいくばくかでも資するものがあることを期待したい。

註

(1) Lynn White, Jr., "The Historical Roots of Our Ecological Crisis" in *MACHINA EX DEO, Essays in the Dynamism of Western Culture*, 1968. 青木靖三訳『機械と神――生態学的危機の歴史的根源』（みすず書房、一九七二年）七六―九六頁。

(2) 代表的なものとして、John Passmore, *Man's Responsibility for Nature, Ecological Problems and Western Traditions*, 1974（間瀬啓允訳『自然に対する人間の責任』岩波書店、一九八〇年）がある。パスモアに限らず、こうした反論においては、自然の「支配者」としての側

面よりも、「スチュワード」（管理者・世話役）として神に信託、委任を受けた人間というテーマが強調される。キリスト教とエコロジーをめぐるその後の議論については、参照、D. T. Hessel & R. R. Ruether (edited by), *Christianity and Ecology*, Cambridge, Massachussetts, 1999.

(3) ホワイト、前掲訳書、九三、九六頁。

(4) 『ローマの信徒への手紙』第八章二〇節（新共同訳による）。

(5) 参照、中井章子『ノヴァーリスと自然神秘思想』（創文社、一九九八年）、二九七頁。

(6) Saint-Martin, *Tableau Naturel des Rapports qui existent entre Dieu, l'Homme et l'Univers*, in *Œuvres majeures*, t.II, Hildesheim, 1980, pp. 18-19（村井文夫訳『タブロー・ナチュレル――神と人間と宇宙の関係について――』、『キリスト教神秘主義著作集』第十七巻、教文館、一九九二年、一六―一七頁）et *De l'Esprit des choses*, in *Œuvres majeures*, t.V.1, Hildesheim, 1990, p. 120 seq（拙訳『自然の解読――ものの精神について――』、同訳書所収、三四四頁以下）.（以下、*Tableau Naturel* は T.N.、*De l'Esprit des Choses* は E.C. と略す。）なお、『誤謬と真理』の中には、「滅ぶべき自然は[・・・]、虚無か夢の如きものである」という、仏教的な響きさえする言葉が見られる（*Des Erreurs et de la Vérité*, in *Œuvres majeures*, t.I, Hildesheim, 1975, p. 537）。

(7) E.C., t.I, p. 125. 拙訳三四七頁。サン＝マルタンはメスメリズムの用語を借りて、ここで「自然全体は催眠状態にある」と言う。

(8) Saint-Martin, *Le Ministère de l'homme-esprit*, Paris, 1802, pp. 55-57.「宇宙は苦しみの床についている」、「宇宙は死の床にある」（以下、本書は M.H.E. と略す）。

(9) M.H.E., p. 131.

(10) Saint-Martin, *L'Homme de désir*, in *Œuvres majeures*, t.III, Hildesheim, 1980, No. 163. 拙訳『渇望する人』、『キリスト教神秘主義著作集』第十七巻（教文館、一九九二年）二四一頁。（以下、本書は H.D. と略す。）

(11) H.D., No. 300. 拙訳二六二頁。

(12) M.H.E., p. 73.

(13) H.D., No. 1. 拙訳一九七頁。

(14) E.C., t. I, pp. 132-3. 拙訳三五二―三頁。

(15) H.D., No. 1. 拙訳一九七頁。

(16) 旧約聖書続編の『知恵の書』の次の箇所を参照のこと。「知恵は神の力の息吹」（第七章二五節）、「知恵は地の果てから果てまで力を及ぼし、

慈しみ深くすべてをつかさどる」（第八章一節）。なお、現代のいわゆる「エコ・フェミニズム」の主張の中では、宇宙を支える神の女性的原理たるソフィアの再評価が行われている。cf. R. R. Ruether, "Conclusion: Eco-Justice at the Center of the Church's Mission" in *Christianity and Ecology*, pp. 610-1.

(17) H.D., No. 300. 拙訳二六二―三頁。

(18) H.D., No. 266. 拙訳二五六頁。

(19) H.D., No. 222. 拙訳二五一頁。

(20) 樹木や植物に関連する比喩とロマン主義的思考法の関連については、cf. Georges Gusdorf, *Fondements du Savoir Romantique*, Paris, 1982, p. 435 seq.

(21) M.H.E., p. 167.

(22) cf. Pascal, *Pensées*, No. 206 et 693.（ブランシュヴィック版による）

(23) M.H.E., p. 77.

(24) ibid.

(25) H.D., No. 295. 拙訳二六二頁。

(26) さらに、この力はある種の「詩人」にも与えられている。古代以来のオルフェウス伝承をロマン主義的な詩人観に受け渡すに際して、サン＝マルタンの果たした役割の大きさについては、cf. B. Juden, *Traditions orphiques et Tendances mystiques dans le Romantisme français (1800-1855)*, Paris, 1971, passim.

(27) 「自然の完成性を常に確信し、自然の調和を描くことに努力する」ベルナルダンに対して、サン＝マルタンは毒蛇や害虫の調和はどう描くのかと問いかける (Saint-Martin, *Mon Portrait historique et philosophique (1789-1803)*, Paris, 1961, No. 1007). 単純素朴な疑問というべきだが、現代において自然界の万物の「共生」を説くエコロジストに対して向けられる反論（特に病原菌の存在について等）にも似ている。

(28) A. O. Lovejoy, *The Great Chain of Being*, 1936.（内藤健二訳『存在の大いなる連鎖』、晶文社、一九七五年）

(29) T.N., t. I, pp. 43-4. 村井訳三〇頁。

(30) 「存在の連鎖」観は十九世紀の進化論を経て、その後科学的には否定されるに到るが、「食物連鎖」という考え方にも見られるとおり、メタファーとしての力は現在でも持ち続けている。

(31) H.D., No. 120. 拙訳二三二頁。
(32) Saint-Martin, *Mon Livre vert*, Paris, 1991, No. 424.
(33) H.D., No. 163. 拙訳二四一頁。引用文中の傍点は原著者によるイタリック体であり、聖書からの引用であることを示す(『マタイによる福音書』六章二九節)。
(34) H.D., No. 88. 拙訳二二三頁。
(35) Wordsworth, "The Tables Turned" (Composed 1798), in *Poetical Works*, London, 1904, p. 377.
(36) 鈴木大拙「禅仏教に関する講演」(小堀宗柏訳)、鈴木大拙他『禅と精神分析』(東京創元社、一九六〇年)所収、五頁以下。大拙は両者を比べて、テニスンを分析的、分別的、知性的、科学的‥‥等々の西洋的心理の代表とし、芭蕉を総合的、合一的、直感的‥‥等々の東洋的心理の代表格とする。ただしこの(極めて分別的な)対比を引き受けたとして、サン=マルタンは芭蕉とテニスンのどちらにより近いのだろうか。なお、近代科学の分析知を批判するサン=マルタンやワーズワースを包んでいた西洋の(前)ロマン主義的潮流が、鈴木大拙の中にも流れ込んでいたことは、ここで改めて指摘するまでもあるまい。
(37) 「だから人間はかれが住んでいる地上の王者だというのは正しい。[‥‥] しかし、[‥‥] 自然のあらゆる要素のあいだには協調が支配している。ところが人間は混沌のなかにいるのだ。動物たちは幸福なのに、その王者だけがみじめなのだ」J.-J. Rousseau, *Emile*, in *Œuvres complètes*, t. IV, Paris, 1969, pp. 582-3. 今野一雄訳『エミール』(岩波文庫、一九六三年)中巻、一四五—六頁。
(38) H.D., No. 46. 拙訳、二一七—二二〇頁。
(39) アンダーヒルによれば、それは最終的な神秘的合一に到る途上の一段階と見なされる。cf. E. Underhill, *Mysticism*, New York, 1974 (1st ed. 1911). 門脇由紀子他訳『神秘主義』(ジャプラン出版、一九九〇年)第四章「自我の照明」一〇六頁以下。
(40) サン=マルタンが「無知なる学者たち」に向かって言う次の言葉、「君たちは生命を構成するのに死をもってし、自然学を墓場から引き出している。/君たちの研究室には何が山積みされているか。骸骨と死体だ」(H.D., No. 7. 拙訳二〇四頁)は、現代の物理学者による次の近代科学批判とも共鳴するものがある。「[「実験」という] この対話から最初に得られたものは、沈黙する自然の発見であった。[‥‥] 人間に対して、自然は、一度プログラムされると、そこに書き込まれた規則に従って動き続けるオートマトンのように振る舞う、受動的で死んだ姿を現した。この意味では、自然との対話は、人間を自然に近づけるのではなく、自然から遠ざけてしまった」。イリヤ・プリゴジン他(伏見康治他訳)『混沌からの秩序』(みすず書房、一九八七年)、三九—四〇頁。
(41) E.C., t. I, p. 53. 拙訳三〇一頁。

(42)H.D., No. 300. 拙訳二六三頁。
(43)H.D., No. 2. 拙訳一九九頁。
(44)M.H.E., p. 312.
(45)T.N., t. II, p. 122.
(46)H.D., No. 36. 拙訳二一五頁。
(47)M.H.E., p. 47.